北陸支部Ｗｅｂ広報誌

[Ah!] No.44

Contents

■建築の現場シリーズ

○富山　北陸新幹線、新高岡駅新築工事の施工にあたって
　　齋藤　篤（佐藤工業株式会社北陸支店北陸新幹線、新高岡駅（建築）作業所　所長）

■インタビューシリーズ

○新潟　シティホールプラザ　アオーレ長岡の建設と現状
　　－長岡市中心市街地整備室総括副主幹 相田和規氏
　　レポーター：澤田　雅浩（長岡造形大学造形学部　准教授）

■かくれた建築シリーズ

○福井　旭座　～福井県内に唯一残る芝居小屋～
　　池田　保裕（京福コンサルタント株式会社）

●お知らせ

○ 北陸支部Web広報誌ＡＨ！への投稿を随時受け付けております。
建築学会北陸支部内（新潟県・長野県・富山県・石川県・福井県）に在住の方であればどなたでも投稿可能です。詳しくは下記事務局までお問い合わせください。
○賛助会員を募集しております。
　詳しくは下記事務局までお問い合わせの程お願いいたします。

(一社)日本建築学会　北陸支部
〒920-0863　石川県金沢市玉川町15番1号　パークサイドビル3F
Tel: 076-220-5566　/　Fax: 076-220-3344　/　E-mail:aij-h@p2222.nsk.ne.jp

（平成２５年９月２７日（金）発行）

日本建築学会北陸支部広報誌　Ah!44号

■建築の現場シリーズ（富山）

北陸新幹線、新高岡駅新築工事の施工にあたって

齋藤　篤
（佐藤工業株式会社北陸支店 北陸新幹線、新高岡駅（建築）作業所 所長）

北陸新幹線、新高岡（仮称）駅の設計コンセプトは、「飛越能の自然･伝統・技術が融合し、新たな時代を具現化するデザイン」とあり、瑞龍寺の回廊・縦格子（さまのこ、ささら戸）がモチーフで、外壁は合掌造り、高岡銅器、能登の珠洲焼などを感じさせる色合い等があげられます。（図-1） このことからも、外装・内装を通じて地元の材料・製品等をできるだけ採用しており、現場からの発注も産地等をこだわりながら実施しております。

当現場の施工にあたっては、下記の項目について、特に注意を要しました。

A.　高架下及び高架上に建屋を新築するため、既設高架橋構造物に損傷を与えないように計画・施工する必要がある。特に高架下においては、作業状況に制限がある。

B.　特別高圧送電線直下で鉄骨建方･屋根葺き作業があり、厳重な注意を要する。

C.　営近工事（城端線上での）作業があり、作業方法について、十分な打合せを要する。

D.　作業においては、土木、軌道、電気（通信、信号、電車線）、機械工事等と競合し、周辺整備工事とのラップ作業があるので、打合せ・連絡調整を密にして工程を進める必要がある。

E.　新高岡駅周辺は区画整理工事を施工している為、工事車両経路が複雑であり事前に周知しておく必要がある。

工事は平成24年9月に着手し、1階コンコースの土間躯体工事から上家鉄骨工事とすすめ、営業線近接工事の鉄骨建方は3月下旬に開始し、全ての鉄骨工事の完了は平成25年4月25日でした。

現況としては、外装工事がおおむね完了して外部足場を順次解体中であり、これからは内装工事に入っていきます。

平成26年8月末の竣工を目指し、職員、作業員一丸となり、発注者はもとより地域の皆様からの信頼と満足を得られるような建物を完成させるように努めてまいります。

■工事概要

工事名称	北陸新幹線、新高岡（仮称）駅新築
敷地面積	3,489.54　㎡
延床面積	6,725.85　㎡（申請上は1,323.39㎡）
構造・階数	鉄筋コンクリート造２階建て、上屋は鉄骨造

図1　新高岡駅鳥瞰図

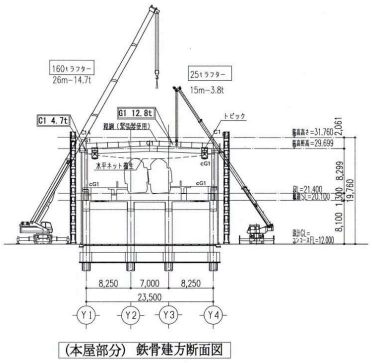

図2　鉄骨建方計画図
（本屋部分鉄骨建方の図を採用）

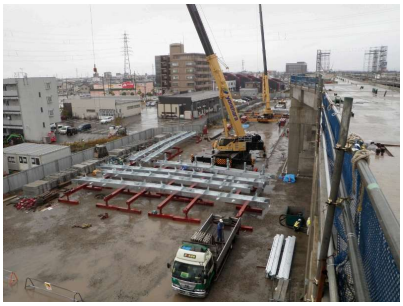

写真1　鉄骨ストックヤード

写真2　鉄骨建方状況

写真3-①　外部足場解体状況

軒高	17.7m
最高高さ	GL+19.8m
最大スパン	23.5m
建物長さ	313m
主な仕上げ	屋根　二重折板葺き
	外壁　アルミカーテンウォール、セメント成形板
契約工期	平成24年5月30日～平成26年8月29日
発注者	鉄道建設･運輸施設整備支援機構　鉄道建設本部　北陸新幹線第二建設局
設計者	㈱梓設計大坂支社・㈱創建築事務所共同企業体
施工者	佐藤工業・竹中土木・砺波工業　特定建設工事共同企業体

写真3-②　外部足場解体状況

写真3-③　外部足場解体状況

日本建築学会北陸支部広報誌　Ah!44号

■インタビューシリーズ（新潟）

シティホールプラザ　アオーレ長岡の建設と現状
－長岡市中心市街地整備室総括副主幹 相田和規氏

レポーター：澤田雅浩
（長岡造形大学造形学部 准教授）

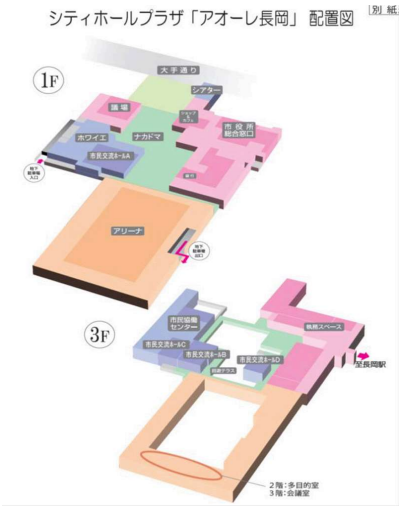

図1　アオーレ長岡の配置図
（長岡市中心市街地整備室提供）

写真1　アオーレ長岡で開催された成人式の様子
（長岡市中心市街地整備室提供）

今回は平成24年4月にオープンした新潟県長岡市の新しい市役所、「シティホールプラザ　アオーレ長岡（設計：隈研吾）」について、建設までの経緯、現在の状況などを長岡市中心市街地整備室　相田和規氏にうかがった。

●市役所機能のまちなか回帰について

【Ａｈ】長岡市は、昨年4月に「シティホールプラザ　アオーレ長岡」の建設を長岡市中心市街地に行いましたが、その経緯について概略を教えて下さい。

【相田】長岡市では、中心市街地を取巻く都市の構造を抜本的に見直すため、平成15年5月に学識経験者をはじめ、地元商工会議所、有識者等の参画を得て「長岡市中心市街地構造改革会議」を立ち上げました。当時、国政では小泉政権下のもと、郵政の民営化をはじめとした「構造改革」といった言葉が非常に流行ったことを記憶しています。それぐらいの勢いを持って、中心市街地にテコ入れを図るといった、当時の市長の思いであったと記憶しています。その会議では、まちなかのまちづくりの基本理念として「長岡広域市民の『ハレ』の場となる新しい長岡の『顔』づくり」という基本的な理念が示されました。さらに、基本方針として、①市役所機能のまちなか回帰が先導する「まちなか型公共サービスの展開」②まちなかを舞台とした「市民協働」の積極的な推進という考え方が示されました。郊外化の進展によって多極分散型となっていたまちの構造を、中心市街地へ都市機能を再集積させていこうという考え方を基本に、市内中心部で懸案となっていた長岡市厚生会館（昭和33年建設）の建て替え、平成16年に発生した新潟県中越地震の被災に伴う市役所の耐震性に関する課題、更には、既に取り組まれていた中心市街地から撤退した大規模商業施設（旧丸大デパート）の空き店舗での「ながおか市民センター」の展開なども後押しする形で、建設が始まりました。

●市民協働の展開

【Ａｈ】まちなか型公共サービスの展開は市役所の中心市街地回帰によってある程度担保できますが、市民協働はどのような形で位置づけられたのでしょうか。

【相田】先の「ながおか市民センター」から長岡における市民協働の実践が始まったと思います。極力役所らしさを抑え、市民が育てていく施設をコンセプトに、自由で規制が少ない空間を提供するよう、当時は、市長から何度もその話を聞かされたことを覚えています。開設当初は、市役所の窓口サービス、ちびっこ広場や多様な市民活動の受け皿としてのフリースペースなどを確保しました。そこでは、多くの人が多様な活動を展開し、自然発生的に

中・高生の自習スペースが形成されたり、ちびっこ広場で子育て中のお母さん方の大切な交流の拠点へと展開していきました。

●シティホールプラザ　アオーレ長岡の誕生

【Ａｈ】どのようなかたちでこの建物が建設されることになったのかを教えて下さい。

【相田】指名コンペによって選出された建築家の「隈研吾氏」によって、ナカドマ（屋根付き広場）を介してアリーナや市役所、議会などをシームレスに結びつける空間が提案されました。建設に際しては、地場産の杉の間伐材などを用い、また、ナカドマの舗装にも工夫がこらされています。結果として温かみがあり、にぎわいのある空間ができあがったと多方面から評価されています。完成は、当初平成24年1月ごろを予定していましたが、東日本大震災発生に伴う建築資材不足などもあり、平成24年4月にオープンすることになりました。延べ床面積は約3万5千平方メートル。半分以上は市民の交流スペースです。また、同時並行で長岡駅から直結するペデストリアンデッキも整備されたため、冬の降雪期でも濡れずにアクセスできる環境が整っています。先ほど、各種の空間がシームレスに連結されていると話しましたが、最大5千人が収容できるアリーナとナカドマもまたシームレスにつながります。これらを一体的に利用することで、巨大なイベント空間が生まれ、市民の方々が主体となったイベントが数多く実施されています。毎週のように、さまざまなイベントが開催され、それ以外にも多くの人がこの場所を使っています。

●建設後の利用状況

【Ａｈ】かなりの方が利用されているということですが、具体的にはどの程度でしょうか。

【相田】建設直後ということで、とりあえず施設見学に来られている方もいるとは思いますが、平成24年度は、実に約152万人の方々が施設を訪れています。これは予想をはるかに超えたと思います。その状況は、平成25年度になっても変わらず、長岡市中心市街地構造改革会議で示された『ハレ』の場として機能しているだけでなく、身近な自分の居場所としても皆さんに親しまれている様子がうかがえます。

●おわりに

　アオーレ長岡が長岡市中心市街地でオープンしてから、1年半が経過した。オープン当初の賑わいが一段落した後も、人々があたらしくうまれたナカドマで思い思いに過ごしている様子が連日見られている。確かに長岡市のまちなかにはこのような「広場」空間はこれまで見当たらず、まちなかで過ごそうとする人は大型商業施設などに行くしかなかった。施設の特性上、その場合外部からは人の気配は感じられず、通りを歩く人が少なければ中心市街地は閑散とした雰囲気とならざるを得ない。現在はナカドマを中心として多くの人の気配がまちなかに生まれてきた。なんとなく楽しそうな雰囲気も醸成されてきた。その点で中心市街地の活性化に新たな可能性を示した事例であるともいえよう。ぜひ一度機会を見つけてこの空間を体験してほしい。

日本建築学会北陸支部広報誌　Ah!44号

■かくれた建築シリーズ（福井）

旭座
～福井県内に唯一残る芝居小屋～

池田　保裕
（京福コンサルタント株式会社）

今、福井県小浜市のまちづくりにおいて、話題になっている古い建築がある。明治から昭和にかけ、芝居小屋、多目的ホール、映画館などに利用されてきた旭座という芝居小屋である。芝居小屋は大正期の全盛時代に全国で少なくとも３千はあったとされているが、現在は３０ほどしか残っていない。福井県内では、旭座が唯一残る芝居小屋としてその姿をとどめている。

旭座は昭和初期から戦後にかけて映画館、自動車修理工場、さらに酒造店の倉庫としてその用途が変化し、現在は祭りの稽古場としても使われている。

小浜市は古くから大陸との交易があり、日本海側屈指の要港として栄え、陸揚げされた大陸文化や各地の物産は「鯖街道」などを経て、近江、京都、奈良にもたらされた。このように港町として栄えた小浜は、多くの芸能娯楽文化を生み出した。

また、小浜市の西部には小浜西組重要伝統的建造物群保存地区があり、近世前期の街路の構成と近世末期の地割が残り、近世から近代に建てられた商家や茶屋、寺社など、商家町や茶屋町、寺町が併存する近世城下町の景観を今に伝えている。旭座はその小浜の文化を象徴し、現代に伝える貴重な遺構といえるのではないだろうか。

建物は木造平屋建て、一部２階建ての入母屋造り桟瓦葺きである。正面から見ると、鬼瓦、立浪型鳥衾、朝日の形をした懸魚、妻壁の木連格子が印象的である。奥の舞台部分は（現在舞台は取り払われている）和組みで、大きな梁を見ることができる。それに対し、客席部分は洋式トラス構造で、小組格子の天井で覆われている。また、建物内部の部材は、ほぞ穴、ボルト穴などが残されており、復元のよりどころとなっている。

数年前から小浜のまちづくりのシンボルとして注目されはじめ、最近では地域の有志により、旭座を広く知ってもらうようにとJAZZライブが開催され、心地よい音楽とともに、レトロな雰囲気に包まれた魅力的な空間がつくり出された。

今年前半には、検討会議の場が設けられ、中心市街地の再開発跡地に旭座を再生し、重伝建地区へのまちなか観光の拠点として、まち全体の賑わいをつくりだす「まちの駅」の整備について議論が交わされ、計画案がまとめられた。 適度なスケール感、レトロな雰囲気、木造の暖かい質感など、居心地のよい空間を演出できる建物として、今後の活用が期待されているところである。

写真1　旭座外観

写真2　朝日の形の懸魚

写真3　内部活用の様子